

史談

2010 (H22) 8・20

■ 平成22年度、総会報告

さる5月29日の午後、中央公民館で22年度の総会が開かれました。21年度の事業報告と決算、並びに22年度の事業計画と予算が承認されたほか、役員改選についても下記のように承認されました。その後、樋口利夫氏による「五・一五事件の三上卓」と題しての講話をしていただきました。会場には三上卓の書が多数ならべられ、参加者による意見交換も盛んに行われました。

■ 白鷹町史談会

平成22-23年度の役員名簿

会長	江口 儀雄
副会長	平吹 利数
	丸川 二男 (史談編集)
幹事	斉藤 幸村
	江口 敏雄
	守谷 英一
	金田 茂也
	小杉 もり子
	菊池 春子
監事	芳賀 由紀
	小形 清子
会計	菅原 光一朗

よろしく申し上げます。

■ 9月には文化財巡りを、
11月には講演会を予定しています。

今年度の事業として文化財めぐり(場所はまだ未定です)を9月に、歴史講演会を11月に行う予定です。講演会は11月6日を予定し、内容は「十王焼について」、講師には南陽出身の高橋拓氏に依頼しています。会報、チラシ、町報などでお知らせしますが、多数の参加を期待しています。

■ 五・一五事件の首謀者

三上 卓の書 2

樋口 利夫

三上卓と兄の接点について考えてみたい。兄は北部第十八部隊(旧歩兵第三十二連隊)小川中隊に召集され所属した。そこには旧南陽市出身の見習士官の某氏も、上級士官として隊員の指導に当たっておられた。ところが兄は戦地には行かず、まもなく除隊となり、直ちに食糧増産隊員として西置賜地方事務所付で、食糧確保に関係する仕事に就いた。

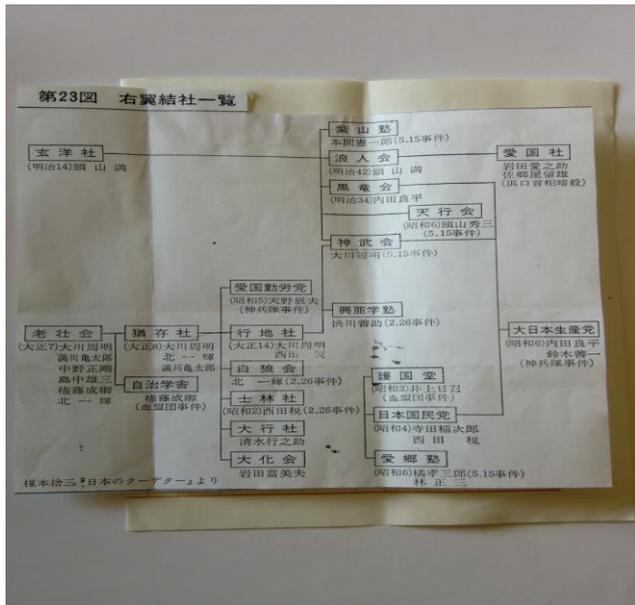
この制度は昭和16年から終戦の年昭和20年までであった。隣家の主人も高等小学校卒業と同時に増産隊員になられた由、現在も元気に農業に従事しておられる。食糧増産も臨戦態勢の一環だったのだろう。化学肥料の運送、配布、さらに開墾なども重要な勤務内容だったそうである。

話を軍隊在籍中に戻して、その間の兄の生活を述べてみたい。中隊長の小川氏や士官候補の某氏から受けたであろう教訓は、軍人としての内容の外に、一般教養としての教えもあったことは言うまでもない。この二人の上級幹部は旧制山形高等学校卒業生であり、共に高校時代に忘れられない一教授がおられた。その人は主に史学を講ずる方で、二人がその教授の感化を受けた上、兄も影響を受けたらしいことは、兄との話からうかがい知ることができた。

その教授は名を「森瑞樹」といい、鹿児島県出身者であった。その上、兄にとって重要なことは教授が西郷南洲の崇拜者であったこと、鹿児島県人だから当たり前といえば当たり前だが、森先生は特に南洲を尊敬しておられたそう。余計に兄は強い関心を持ったと考えられる。兄が『西郷南洲先生遺芳』という書物を持っていたことは、けだし、当然のことだった。これは別の名称を『西郷南洲翁遺訓』ともいう。

五・一五事件(昭和7年5月15日-1932年)については既に概要を述べているが、当時は幾多の類似した事件があった。目立ったテロ事件を主導した右翼団体の構造図があったので引用したが、各種右翼団体の主宰者の人物像について

は不明な点が多く総てについての理解は容易ではないと思われる。



兄についても、上の図にある右翼団体にどれほどの理解があったかは不明だが、おそらくさしたる理解ではなかつただろうと思う。



森先生の教訓もひたすら南洲遺訓が中心の訓話だったのであると思われる。時たま休暇で家に来ることもあったが、ぼそぼそと話をすることの多くは遺訓についてであったようである。(続)

■ 嫁の部屋・姑の部屋

最近、聞いた話である。嫁の留守の間に、姑が嫁の部屋に入った(らしい)というのが話の始まりである。これにはいわゆる世間の嫁・姑の話以上に考えさせるものを含んでいる。

まず「らしい」のだから、そうではないかもしれない。しかし「入ったらしい」という不信感がすでに嫁の方に存在する。「入っている」現場を

見たならばともかくも、あやふやなことを下手に口にすれば「ありもしないことを言い出す嫁」ということになるだろう。

仮に「入った」とすれば何の用か。これが是か、非かということになれば、そもそも用はないだろうし、是とは言えまい。とすれば「好奇心」か「痴呆」であろうが、中には「痴呆のような好奇心」というのがあるらしく、嫁の装飾品をながめる場面などがドラマなどに出てくることがある。だが現実的に「非」だとしても、それにどう対応するか。これについては外国の家のように各部屋に鍵をつけるか、別に住むか、離婚以外にあるまい。

だいたい日本の家屋は各部屋に鍵をつけないし、家族間のプライバシーについてはあいまいなままになっていて、かなり緩やかなタブーという形で今まで放置してきたところがある。そのタブーが壊れ、意味を失いつつあるのが、現代であるといっている。見えない神仏を恐れ、信じてきたのはタブーがその意味を持っていたゆえであろう。逆に他人同士が家族となるには、やはり暗黙の了解に基づくタブーがあり、それゆえのむずかしさがここにはある。最近、二世帯住宅が建つのもこうした事情がからんでいるのだろう。

今はおそらく「家族」という言葉の意味・内容が、大きく変化している最中である。これからは家族が一つの屋根の下に住んでいるとは限らないし、同様に夫婦もそうになっていくのかも知れない。まるでフィクションの世界のように……。しかしその先はわからない。始めの話にもどれば、実害がなければ放っておくというのが、当面の最良の対処法だというのが、むしろこれが一番むずかしいのではあるまいか。(木)

■ 残暑御見舞い申し上げます

今年は梅雨が明けてから長期間、猛暑が続きました。嘘のような天候です。これだから天気はあてになりません。

この地方では8月のお盆が過ぎると急に涼しくなるのですが、今年はどうなりますか。どうぞ体調の維持・管理に注意して、この夏を乗り切ってください。(川)